

2008年3月30日

ダニエル エルリック牧師

シリーズ : 始まり #11

題 : 神は衣を着せられた

聖書の箇所 : 創世記 3:16-24

## I. 初めに

おはようございます。この絵を見てください。何が見えますか。中庭？それともベランダでしょうか？それは、皆さんが、どこに焦点を置いて見るかによって、決まりますね。もし、上半分に焦点を置いて見ると、御自分の上にベランダが見られるでしょう。もし、下半分に焦点を置けば、御自分の下に中庭が見られます。私たちがどのように見るかによって、見える物が違ってきます。



鏡を見ますと、何が見えるでしょう。罪人？それとも聖徒でしょうか。皆さんが、自分自身にだけ焦点を当てて見ると、ただ罪人だけ見えるかもしれません。でも、私たちがイエス・キリストとの関係に焦点を当てますと、鏡の自分に、聖徒が見え始めます。私たちは、みんな罪人です。けれども、聖書は、私たちを聖徒と呼びます。それは、私たちがイエスに信頼を置くとき、義であると宣言されるからです。どちらの実体も、画像の大切な部分ですが、私たちが聖徒としての自分自身に焦点を当てると、平安が得られるのです。先ほど、レベッカが、「私は誰？」と尋ねる歌に合わせてパントマイムを見せてくださいましたが、信仰の心は、こう答えます。「私は神のもの。神に属するもの。神の養子です。」

物事をどのように見るかは、自分が見る物に違いをもたらします。これは、又、自分がどう聖書を読むかに応用できます。ある人は、罪の話だけを、旧約聖書においては審判だけを見ます。けれども、もし私たちが見る目を持ちますと、あらゆるページに、神の愛と恵みが明らかにされていると分かります。今日の聖書の箇所は、アダムとエバに対する神の審判として、よく知られている所です。でも、もっとよく見てみましょう。私たちは、そこに明らかにされている神の憐み、恵み、愛が見えるのです。

## II. 聖書朗読 創世記 3:16-24 (新共同訳)

(16) 神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め／彼はお前を支配する。」(17) 神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い／取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。(18) お前に対して／土は茨とあざみを生えいさせ／野の草を食べようとするお前に。(19) お前は顔に汗を流してパンを得る／土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」(20) アダムは女をエバ(命)と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。(21) 主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。(22) 主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」(23) 主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。

(24) こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた



### III. 教え

創世記3章では、悪魔が蛇の形となり、エバを唆します。エバは、悪魔の嘘を信じ、善悪の知識の木の禁じられた実を取って、食べてしまいます。エバは、それをアダムにも分け、アダムも食べてしまうのです。神は、悪魔、エバとアダムを裁かれた後、かれらは、エデンの園から追放されてしまいます。

エバへの裁きの中で、神は、出産での痛みを増し加えられます。そして、アダムへの裁きの中でも神は言われます。土は、呪われるものとなり、茨とあざみを生え出でさせると。これらの裁きは、人の命にある痛みや悲しみのすべてを代表するものですが、それらは、又とても具体的に言われています。それは、これらの審判が単なる罰を超えて、もっと深い意味を持つかどうかを尋ねるよう私たちに仕向けられています。



私は、これらの審判が、実に救いの道をさし示す哀れみの行為であると信じます。私たちは、先週、日の箇所ちょうど前の御言葉を深く考える時間を持ちました。**創世記 3:15** です。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く。」この御言葉の学びの時、預言者が、どのようにしてメシア（救い主）がここに来られ、悪魔を破滅させたのかを語っていると分かりました。しかし、メシアも又、苦しまれ、蛇がメシアのかかとを砕くのです。

救いは、女の子孫から生まれてくるのですが、救いの喜びは、痛みなしでは成し遂げられません。エバに対する神の審判が、ひどい生みの苦しみであるというのは、偶然でしょうか。この痛みは、女の子孫が耐えることになる十字架上の死の苦しみを予知していると考えられないでしょうか。



生みの苦しみは、ひどいものです。でも新生児が生まれる喜びは、生みの苦しみより、遥かにすばらしいものです。母親が自分の手に赤ん坊を抱く時、生みの苦しみは記憶の中に薄らいでいき、心は新しい命の喜びでいっぱいです。この喜びは、イエスの復活の喜びを予知しているとは考えられないでしょうか。私は、神がこの審判をもたらされる時、愛する者である人々を救いに導きようと、そのようにされたと確信します。そして、生みの苦しみは、エバ自身の子孫から生まれて来ることになっているメシアへの信仰に、エバを導かせたに違いないと思います。



アダムはどうでしたか？大変な労働をもたらした審判からアダムは、一体何を学んだのでしょうか？エデンの園では、食べ物を自由に手に入れることができ、労働は喜びでした。園の外では、食べ物は、大変な労働を通してのみ得る事ができますが、それも確かではありませんでした。たとえもし、アダムが全身の力をふりしぼって、働いたとしても、彼は、ただイバラとアザミの作物を受け取るだけかもしれません。または、嵐がやってきて、収穫の前に作物をみんな台無しにしてしまうかもしれません。



農作物を育てるといふ大変な労働が、ほとんど何の収穫ももたらさない時、男は、そのことから何を学ぶのでしょうか。私は農家で育ちましたので、不作は、人々に神を求めさせるようになることが分かります。都会では、無神論者がたくさんいます。それは、都会にいる人は、自分自身が自分の運命をコントロールすると思うからです。でも、もし皆さんが、農家の人の所へ行き、かれらと話をすれば、農民には、ほとんど無神論者がいないことが分かるでしょう。それは、農作物を作る人は、多くのことが自分のコント



ロール下ないと知っているからです。日本の米作りに携わる農夫は、多くの神を信じているかもしれませんが、アメリカのトウモロコシ作りの農夫はただ唯一の神を信じているかもしれません。でも、アメリカには無神論の農夫がほとんどいません。

農場経営は、人に自分の限度を教えます。農場経営は、人に自分の努力が、決して十分ではないと教えてくれるのです。すなわち、天からの哀れみがきわめて大切ということです。農作物の栽培は、人に祈ることを教えてくれます。けれども、たとえ皆さんが農夫でなくても職場や学校で、自分のコントロールの限度を超えていることが、どんなに多くあるかに気付けば、同じことが分かります。思い上がった人は、すべてのことを自分でコントロールできると思っています。でも、見極める目を持つ男と女は、神が恵みをくださる時のみ自分たちの努力が成功すると分かるのです。



神の審判のおかげで、女はメシアが来られてすばらしい喜びを運んでくださることを絶えず思い起こします。けれども、ただひどい痛みの後だけですが。神の審判のおかげで、男は、絶えず自分が神でないと思ひ起こします。ですから、癒しと恵みのために、男は天に泣き叫ぶことを学ぶのです。神の審判は、救いの道を教えてくれます。アダムは、そのことに気付いているでしょうか。アダムとエバは、救われるのでしょうか。私の答えは、「はい」です。二人が罪を犯した時、初めかれらには悔い改めの気配はありませんでしたが、この時から、私たちは信仰のしるしが見え始めるのです。



創世記 3:20 には、アダムの信仰の成長が、ほのめかされています。「アダムは女をエバ（命）と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。」神が福音と審判を告げられた後、エバは、初めて名付けられます。皆さんは、エバという名が、どういう意味かご存知でしょうか。それは、「命」という意味です。この時、アダムとエバは、まだ一人も子供がいません。ですから、この名前は、神の約束と愛にあるアダムの新しい信仰の宣言であると思われます。ここでアダムは、エバが、真理の霊の命を取り戻す救い主をもたらすであろうと信じるのです。

次に 3:21 では、こう告げます。「主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。」神は、二人に衣を着せられます。アダムとエバが、罪を犯した後で、作った葉の覆いは、十分ではありませんでした。でも今、神は、かれらに新しい衣服を与えてくださっているのです。これは、アダムの新しい信仰に対する神の承諾だと思われます。同時に、動物の皮の使用は、罪の赦しに血が流されることが必要であると教え、それは預言的に十字架について語っています。多くの人は、神が動物を殺したと想定していますが、実は御言葉はそう言っていません。そこで、私は、もしかしてアダムの信仰の表れとして、アダムに動物を犠牲にさせたのではないだろうかと思ひます。もし、そうだとしたら、創世記 4 章にある、カインとアベルの話の中で、なぜ、動物の犠牲がもうすでに適した犠牲であると考えられていたかということを説明していると思われるのです。



創世記 3:22 「主なる神は言われた。『人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。』」クリスチャンにとって、神がここで複数形を使っておられるのは、よく理解できます。それは、神が三位一体であること、つまり父と子と聖霊であることが聖書で教えられているからです。けれども、ここで聖書が述べていること、神が善と悪を御存じだとは、一体どういう意味なのでしょう。神学者は、これに対して答えを出すに至っていません。しかし、前に私たちは、聖書の中で「知ること」が、経験を伴うということ学びました。アダムは、罪を犯し、罪から来る痛みと苦しみを経験しました。神は、何の罪も犯されないのに、私たちの罪による痛みと苦しみを経験してくださるのです。私たちにとって、このことが最も痛切にわかるのは、キリストの十字架においてイエス御自身が世の罪を請け負ってくださったときです。でも実は、私たちが罪を犯すたびに、神は痛みと悲しみを経験されていると思ひます。私たちの罪は、神の御心を深く悲しませているのです。

アダムとエバが罪を犯した後、二人は善の喜びと、悪から来る痛みや悲しみもまた知るようになりました。それは、彼らの日々の生活の部分となったのです。そして、今日においても、それは、私たちの生活体験の部分となっていますね。けれども、神は私たちを愛し、罪から来る痛みと苦しみを永遠に体験することを望んでいらっしゃいません。ですから、主なる神は人について言われるのです。「手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」どうやら、彼らが罪を犯した後でさえも、まだ永遠に生きる可能性があったようです。もし、彼らが命の木から食べていたとしたら、罪深く墮落した状態で永遠に生きていたことでしょう。

皆さん、それがどんなにひどいことか、想像できますか。もし墮落したアダムとエバが、自分たちの罪から始まった苦痛の世に、ずっと向き合っていなければならないとしたら、どれほど大変だったことでしょうか。それで、神は愛と哀れみから、アダムとエバをエデンの園から追い出し、命の木に至る道を閉じられたと分かっていただけだと思います。墮落した世の中でいつまでも生きていく代わりに、ちょうど良いときに天国の家に戻るといえるのは、どれほど素晴らしいことでしょうか。死は、敵であり、いつの日か、死は滅ぼされるのです。けれども、その時まで、神は私たちの善のために死さえも用いられます。それは、この墮落した世から離れ、ちょうど良い時に主の所へ戻ることが、主の愛と哀れみだからなのです。

#### IV. まとめ

もし、私たちがよく見る目を持っていれば、聖書のどのページにも、神の愛、哀れみや恵みを、見つけられるでしょう。今日の聖書の箇所、審判、死、呪いと痛みについて読みました。けれども、もし主の方に、自分の目の焦点を向ければ、主の成してくださったあらゆることが、愛から流れ溢れ出たものであり、アダムとエバから始まって、私たちすべての人間のために、救いの道を用意してくださっていることが分かります。神は、アダムとエバが罪を犯したとき、驚かれませんでした。それは、神が世を創造される前から、ご計画の中にあっただからです。けれども、最終的には、そのことが、すべてを新しくし、今までより更に素晴らしい命に導いてくれる審判だったのです。

神が約束してくださっている天のエルサレムでは、次のようです。  
(ヨハネの黙示録 21 : 4) 「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」天国は、私たちの想像をはるかに超えて素晴らしい所、エデンの園よりも更に素晴らしいのです。私たちがそこでイエスと共にいることを知る喜びは、ただ驚くばかりでしょう。さあ、祈りましょう。



#### V. 最後の祈り